

れ、死者の遺品の供養の受付、大祭日以外の諷誦文の受付などもしているようだ。

水子地藏堂の奥に人形堂があり、未婚の男女の霊を供用し、結婚適齢期になれば神様が結んでくれるという伝説で、ガラスケースに入れた男女の人形が、所せましと並べられている。

この外にも休憩室や、いろいろな建物が建てられ、川蔵賽の河原も昔の暗いイメージから脱却して、信仰と観光の地へと変身したようである。



(水子地藏堂、奥に人形堂がある)



(賽の河原事務所)

嘉瀬今昔追憶の記

秋元 惣之進

子供の頃（昭和五年）、村の様子を断片的だが、記憶をたどり簡単に綴って見た。

第一話 吹溜り

嘉瀬から金木に行く途中、嘉瀬の畑中町内の外れに小田川の「奴コ橋」が有り、奴コ橋から二百米位行くと、昔は小高い約三米位の丘陵がある。俗に「館コ」と言った。

明治初年に道路を通す為に小高い丘陵を掘削して道路にしたが、完全に整備着工されたのは明治四十三年と言う。掘削した丘陵の道路は冬の降雪期に入ると切り割（掘削）に雪が入って埋り吹溜り（流れ）が出来て人馬の障害となった。

又、金木の入口の伊藤製材所の所も大きな山の様な吹溜り（流れ）が出来た。春になり村の雪はすっかり消えても「館コ」の切り割りだけは雪が凍って「スガマ水」となり中々消えないので、村中総出で凍った固雪（氷）を鉞や「スコップ」で壊して捨てて人馬が通る様にした。

第二話 お歯黒

私の「アバ（母）」の母親は北屋（飯塚商店）出身で、アバ（母）の父は今の原田一実さんの家の別家だと言う。私が幼少の頃に曾祖母の家に良く遊びに行ったが、祖母は何時も囲炉裏の岸に硯箱の様な箱の中の缶に真黒い墨汁の様な汁で歯を磨いて居るので、幼少ながら何しているのと聞くと祖母は「お歯黒」と言って歯を染めると虫歯になりにくく、既婚者と未婚者の区別が出来て、衛生的に良いのだと聞かされた事を今、思い出して綴って見た。

第三話 貰い水

普段に家庭で使用する呑み水であるが、昔分家した貧農の一般家庭にはあまり井戸は無かったが竈（釜処）の古い家から、普段貰水をして生活して居ったが、其の井戸も大底は家外にあった。井戸には蓋もないので風の強い日などは塵（芥）や埃が入り不衛生だった。又、甚だしい時には鼠や猫の死骸が落ちてい

たり、其れを知らないで何日も家庭飲料水として飲んで居った。今、思うと良くも病気にならなかったと思うが、不衛生な水を呑んでも当時の人は抵抗性があったのかと思う。

第四話 薬師の井戸ッ

嘉瀬には薬師神社が二社あるが、私が小さい頃、鍛冶町の薬師神社に一坪位の範圍の所から湧水が湧いて居り、其の湧水で目を洗うと目の悪い人は目が治り、湧水を呑むと体の毒を出すとかで特に旧七月七日の七夕祭には村の人々は勿論、近郷近在の人々も来て湧水を呑んだり、徳利に汲んで家へ持って行き目を洗うのである。幼少の頃だが、沢田薫さんは、こんな湧水の濁った水で目を洗うなんて、かえって目が悪くなり、これは迷信だよと言った事が今でも鮮明に頭に浮かぶ。

第五話 蟹網

私共が小さい頃は蟹網を編んで旧十川（シン川）に九月十月頃の月夜の晩に蟹網を十枚位持って蟹釣りに行ったが、九月十月頃は蟹の産卵期で釣った蟹を煮て腹を割って見ると卵が腹に一杯入って居り喰べると美味かった。又、田圃の堰や小堰には「メダカ・ウルメコ」や泥鰌、鰍、田螺、小さい巻貝が無数に散乱して居り、又、大堰や堰などの蟹穴に手を入れて鮚や蟹を取ったが蟹穴に手を入れて蟹の鉋で指を「ハサマレ」た事もある。

第六話 隔離室

私共が幼少の頃、今の新町通り（駅通り）に伝染病の患者を収容した隔離舎の建物があった。昔は隔離舎の近辺には人家も道路も無かったが、私共が小学校へ通う頃は隔離舎は閉鎖されて居り、隔離舎の隣りに立派な道路も出来て居り、小学校へ行く時は隔離舎を横目に見て学校へ通った。

第七話 『ジャンボ』刈り

昔は何処の家でも大底「バリカン」があった。男の人は「バリカン」で頭の髪を刈ったが、頭の髪を刈る事を「ジャンボ」刈ると言うた。古びた切れない「バリカン」で父は子供の名を呼んで「ジャンボ」刈ってやるから来いと言って、子供の頭を押さえながら刈るが「バリカン」に髪が引っかかり、思わず痛いとかぶと父は我慢しなさいと叱かり「バリカン」に油を一寸とつけて、又、頭の髪を刈るが、刈った頭の髪は「トラ刈り」であったが、大低の子供は「トラ刈り」頭だった。

第八話 煤掃き

嘉瀬では昔、家の中の「煤掃き」ススハキがあった。煤掃きには箆筒、長持とある物を全部外に出して土台下も綺麗に掃くのである。

検査日がくると常会長を初め、村会議員や巡査が検査にくる

と、父母は真黒な手拭を頭から取り、平身低頭に頭を下げる。

巡査は目を光らせ「親爺」掃除したかと「スカ目ツラ」をして、そこを睨み、巡査は良し合格だと言って検査済證を渡す。当時の巡査は最も怖い職業の人で有り、当時は巡査を旦那様と呼んだ。

第九話 濁酒

終戦後は喰べ物や呑み物が無かった貧しい頃、田舎では濁酒が流行したが、密造酒は違反であった。

当時、清酒は私共貧農には高価で高嶺の花的存在でとても手が届かなかつたので愛酒家は自分で濁酒を造って呑んだが、素人の造る濁酒は徳利の上の方は「カスカ」に澄むが、八分位底の方は濁ってとても呑めなかつた。嘉瀬の某氏（亡）は昔、杜氏をした事が有り、濁酒造りは非常に上手だった。

蒸した米と麴、イースト菌に生温い水を樽に入れて、冷暗所に置き、一週間位発酵させてから麻袋に入れて「フネー搾り器」で濾過して濁酒を清酒の様に澄ませた。某氏は濁酒の醸造中は豚小屋に隠し、酒樽の上に消毒した布を冠せ不純物が混じらない様に常に衛生管理に気をつけた。

某氏の造った濁酒は一升百数拾円だったと思う。某氏は内密で濁酒を隠しながら密売して生活の支えにしていた。当時、冠婚葬祭には清酒二升の配給があったが、冠婚葬祭には人が大勢集まるので二升の酒では、とても不足だった。

又、清酒は当時、高価で私共の貧農には手が届かなかつた。

私の祝言にも某氏の造った濁酒の澄んだので三日間祝った。

私の母は某氏の造った濁酒を麻袋に入れて搾り取った残りの酒粕を時々貰って来て、蒸し器に入れて蒸発させた湯気を一升瓶に集め焼酒にして良く呑せたものでした。

第十話 サルケ穴

今から数拾年前の暑い暑い夏の野薔薇の花の咲く頃、子供達はあまりの暑さに嘉瀬溜池に水遊びに行き、子供達は黒山の様になって居ったが、突然、誰かが「イツヨ子」が泳いでいたが、沈んで浮んでこないと言きながら大声で叫んだが、そこは深い「サルケ穴」で子供達は其の辺迄は誰れも行かず出来なかつた。

「イツヨ子」の親達に知らせて来いと誰かが言ったが不在だった。又誰かが「イツヨ子」の親達は田圃で三番目の田の草取りをして居るから私が知らせると言って走り出すと、すぐ父親がかけつけて来た。父親は、どの辺だと聞くと子供達はあの辺だと指差した。死んだ「イツヨ子」を、父は抱いて来て平地に上った。又、昔、嘉瀬小学校の運動会に若者二人が酒に酔った勢いで溜池の向岸迄、泳いで行く途中、溺れて亡く無ったと言う。

嘉瀬溜池で三人が亡くなって居る。

今、思い出すと私が五歳の頃、父母は学校の隣りを汽車が通るから見に行きましようとして私を連れて行ったが、汽車とは何んだか分らず其の儘、付いて行くと大勢の村人が黒山の様に見学に来ていた。愈々、時間が来て汽車が見えた時は子供ながらに「家」の様な大きな物がどうして一人で走るのがかと思議に思つて驚いた。

「津鉄鉄道は、昭和五年に開通した」津鉄の汽車は沿線の人々や米、石炭、縄、材木、其の他の物を運び、沿線の人々の喜びは大きく、恩恵を与えた。

当時の私鉄は冬になると真中に「ダルマストーブ」が置かれ、夕方には「ランプ」が灯されて「ランプ」が汽車の振動で「ブレーンプラン」と振れたと言う。当時の大人達の話の聞くと汽車が通り便利になったが、金木の西（稲垣方面）金木以北の人々が汽車に乗り、金木を通過して五所川原に行く様になったと言う。其れ迄は金木に買い物（町買）に来ていたが、五所川原は商品が豊富で安く飲樂的な面も有り賑かだったと言う。又、今なお津鉄列車は健在で六十九年間も走り続け「ストーブ列車」「風鈴列車」「俳句列車」と異名を取り、県内外に名を売り、沿線の人々や物資を運んで居る。

嘉瀬村を歓呼の声と日の丸の旗の波に送られて出征し、戦地で勇戦奮闘して「帰還」した軍人達は、祖国の為に人柱となつて内外で戦死した御魂を安らかに眠らしめる為、招魂堂を建立しようではないかと軍人会、戦友会、全員協議の結果一決した。戦死で勇戦奮闘、鬼と化して帰還した軍人達は「いずれ」自分達も招魂堂に入る覚悟を腹に決めていた。招魂堂は亡き戦友の冥福を祈る為であるが、自分達もいずれ、又、出征し無言（戦死）で歸ってくるだろうと深く心に決め招魂堂を一日も早く竣工しようとして決意し着工した。招魂堂は昔、五所川原から金木に至る県道介の通りの嘉瀬溜池（清久）の南側にあったが、数年前に嘉瀬観音山に移転建立された。（今の農協低温倉庫の所）嘉瀬の戦没者の招魂堂の碑に刻まれて居る戦没者の氏名は二百一人である。（上村も含む）

（付記）

- 嘉瀬八幡宮の敷地は一町〇一畝四歩
- 辛夷の木（田打桜）二十三本
- 鳥居 八基

特別寄稿

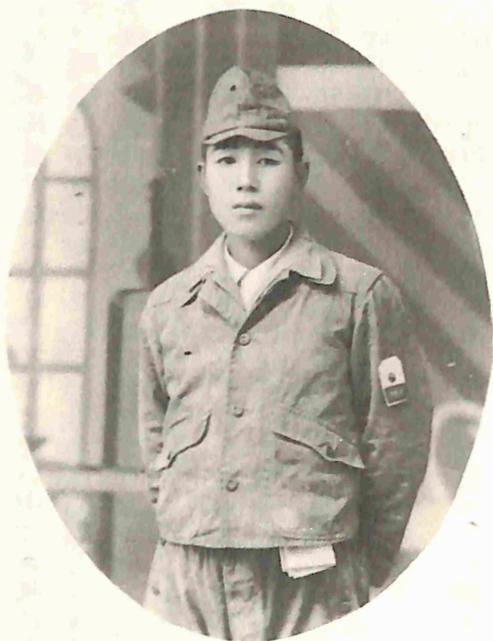
私の体験記

此の世で地獄を見た

中西 昭 治

昭和二十年一月三十一日、香川県小豆島にある陸軍特別幹部候補生隊に入隊すべく、金木駅を出発した。満十六才十ヶ月の時である。

この年は近年にない豪雪で、前後二十日位津軽鉄道は運休続



昭和20年9月（18才）

きで、
出征軍
人は大
釈迦ま
で歩い
た時で
あった。
幸いに
この日
だけ、
しかも

一往復だけ列車が走りました。一緒に出発したのは六人位で、陸軍は私一人、全員志願兵であった。
この列車も、津軽飯詰駅を発って間もなく、なぜか最後尾一輛だけ切りはなされました。

豪雪で、あえぎあえぎ走っていたので、機関手も気付いたのか、又戻ってきて、連結されました。一緒の戦友達と『縁起が悪い、戦死かも』と話したものです。

その夜は、米・木炭持参で、青森市古川の西北館（現金木町米町）に泊った。

昭和二十年の戦況は、制空権も、制海権も敵の手中にあり、日本軍の末期状態であった。

戦況が悪化するにつれて、軍当局は、幼年学校はじめ、陸軍士官学校、海軍兵学校、海軍予科練習生、少年飛行兵、戦車兵、陸軍特幹生等々、少年達志願兵の募集に力を入れていたときで

した。不貝者でない限り、どうせ近い中に兵隊にとられる私です。同級生の中にもすでに五・六名は志願し入隊済です。青年学級でも盛んに志願を推めておりました。

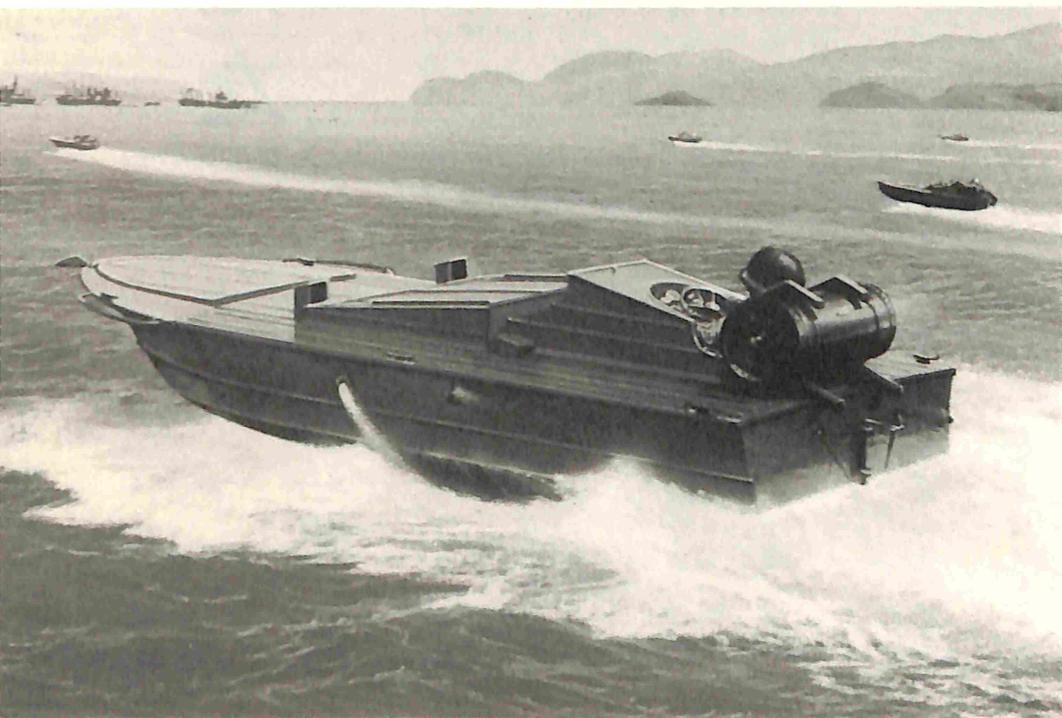
小学校一年生の修身にある、キグチ、コヘイラップ手から始めて、徹底した軍国主義教育を受けた私達は、愛国心に燃え、国のために死ぬことは、男子の誉れであると思っていた。戦争の末期も知らず、大本営発表の戦勝々々を信じ、日本は必ず勝つと信じていました。

昭和十九年、七ツ釘にあこがれ、海軍予科練と、陸軍特別幹部候補生の二つを受験しました。結果は、予科練の方は飛行兵は落ち、一般水兵に合格、陸軍も第一志望の飛行兵は落ち、船舶生に合格した。

予科練の二次試験で霞ヶ浦航空隊に行った時、予科練生達が海軍の伝統的罰則と称する失神するまでなぐられる様を見て、海軍に志願したことを後悔した経験があったので、海軍を辞退し、陸軍船舶特幹を選んだ。

特幹兵には『陸軍現役下士官補充及臨時特例』昭和十八年十二月十四日公布勅令第九百二十二号があつてそれによると、特別幹部候補生は、入校後、直ちに一等兵を命じ、爾後概ね六ヶ月の後上等兵に、更に概ね六ヶ月の後伍長に進級せしむ云々の特例があつたこと。船舶兵は、大きな輸送船に乗るものと思つたからです。

小豆島で船舶兵としての基礎教育を受け、一期の検閲も終り、



二十年六月、

広島の江田島に転属

何とこ

こは、

陸軍海上挺身

戦隊

(特攻隊)の

秘密基地であつた。

その

任務は、

長さ約

五メートル、

幅約二

メートル

そうはいかない、そこで艇尾の爆雷を投下したら、全速で方向転換して帰還する方法であつた。

夜間演習は江田島周辺で行われ、船体を組んでの行動は全くの無灯火である。僚艇との距離間隔は、スクリュウの回転によって発生する夜光虫(海水の搔乱によって燐光を発つ虫の集団)の光によるものであつた。

運命の八月六日午前八時十五分、前夜の夜間訓練のため起床(上半身裸体)。突然大量のマグネシウムが焚かれた様な閃光が走り、殆ど同時に耳をつんざく様な大音響と、物すごい爆風を感じた。

見ると、基地より北へ約十二キロ位はなれている広島市の上空に、大きなキノコ雲が、火山の大爆発のように中天高く、濃く、厚く、まるで生物のように、あとからあとから湧いていた。その時は広島市に何が起つたのか、もちろん知らなかった。上官からの説明もなかった。"広島島のガスタンクが爆発した"とか"宇品にある船舶司令部の弾薬庫に、敵のスパイが火を付けた"とかの噂が飛んだりした。兵舎の窓ガラスが割れたりして、配食中の朝食に煤が落ちて食べられるものでなかった。

晴天の広島上空のキノコ雲は本当にきれいで、しばし見とれたくらいであつた。

これが米軍のB29『エーラゲイ』が広島に投下した、全長三

ル弱、六気筒エンジン一基、最大速度二五ノット(時速四十五キロ)、ベニヤ製のモーターボート、その艇尾に二五〇キロ爆雷を装備、一人で敵艦を攻撃するものであつた。

その頃は、敵は本土上陸を狙っていた時でしたので、それを阻止するには、敵船団を上陸する前に撃破する以外になかった。上陸準備のため、泊地にある敵艦を夜間奇襲し、敵艦の機関部(煙突の真下)あたりに艇尾を衝突、接触させ爆雷を投下、一艇をもって一艦を屠るのが、私達の任務であつた。

前述の臨時特例による『入隊と同時に二ツ星』は若い志願兵を釣る餌と考えていたが、実は一人乗りの艇では、乗員は指揮官でもあるわけで、軍の規則によれば、下士官以上でなければ乗れない定めがあつた様です。

転属と同時に特訓に入った。何しろベニヤ板製の舟ですので、敵に発見されたら、小銃にでも簡単にやられてしまいます。そこで訓練はもっぱら夜間を想定していたものであつた。

エンジンの故障排除も、昼は目かくしで手で震動を感じ、耳でエンジンの異常音を察し、鼻で排気ガスの程度を知る、と云つた訓練であつた。

私は三期生ですが、一期生達は、すでに南方で可成りの戦果を挙げたと聞かされておりますが、当初は艇首に爆雷を積んで、そのまま体当りする、いわゆる自爆行為であつたそうです。

私達の時は、ベニヤの艇はいくらでも作れるが、若い兵隊は

メートル、直径七十一センチ、重さ四トンの、ウラニウム爆弾（原子爆弾）だったので。（広島上空約六百米？で爆発）。
原爆は核分裂の連鎖反応から放出される巨大な核エネルギーを破壊目的に使用する兵器で、火薬の爆発力を利用した従来の兵器とは、質的に異なる兵器です。

特徴はさまざまに熱線と爆風、そして放射能で街を壊滅的に破壊しつくし、人間の身体に複雑な被害を与えるものです。

爆心地直下の地上到達温度は約四千度、熱線と火災による火傷、爆風は爆心地付近では音速以上、爆心地より一・三キロでも風速毎秒一二〇米が吹き荒れ、地上の人間や建物に襲いかかりました。

爆心地から一キロ以内では、九十％が死亡し、広島では十三万人から十五万人が殺されました。目に見えない放射線が街を覆い、幸いに一命をとりとめた人にも、通常兵器には見られない急性の放射線障害（だるさ、吐気嘔吐、高熱、下痢、出血、脱毛、白血球減少）などが襲いました。

たった一発の原爆で十万人以上の生命を奪った核兵器は通常兵器とは比較にならない程、広範囲に及ぼしただけでなく、時間的にも長期に亘り、爆破五十年を過ぎた今でも、被爆者はその後も後遺症に苦しんでいます。

現在全国に約三十三万人余、我が青森県にも広島・長崎合せて百人を越す被爆者が居ります。

ましてもいいとの指示が出てからは、首を持ち上げて、水筒の水を飲まずと、そのままガックリ息を引きとる者もあった。

ここは陸軍の検疫所ですので、軍医も衛生兵も居たが、負傷者に対する手当も、赤チンを塗る程度であった。負傷者の大半は、その日の中に死んでいった。焼けただけだれた皮膚の下には、うじ虫がうごめいている。死体は茶毘に伏すこともなく、大きな穴に大量に埋められた。

八日から私は広島市内に入りました。私は広島市内は殆ど不案内で、しかも焼ヶ野原ですので、何処に入ったのかわかりません。

所々で未だ立木が燃えくすぶっていた。路上に馬が数頭倒れ、腹から内臓が飛び出している。焼けただけだれた黒焦げの死体、男女の区別もつかない黒い物体。虚空をつかんで目玉が飛び出している者、脳が吹き出ている者、胴体だけの者、電車は三十米も飛されて、レールは鉛のようにひん曲っていた。

その電車の中の死体は、死んでから電車と共に焼けたのか、電車の火災で焼け死んだのか、中ば白骨化したものもあった。

建物疎開に動員されたのであろう中学生や女学生が、一列に並んで死んでいた。異様な大爆発はわかっていても、まだ惨過の本当の内容は知っていなかった私達は、歩一歩進めるたびに驚倒し、戦慄を覚えた。

踏む地面も焼けつく様に熱い、生きてる人も半裸、若くは全

被爆と同時に、広島は全市が火に包まれました。広島市内の軍・官・民の指揮組織は、爆心地より五キロはなれた、宇品にある船舶司令部を除き、すべての組織がその機能を失ってしまったので、船舶司令官の指揮の下に、船舶部隊（曙部隊）が直に救援活動に入った。

私達の戦隊は近日中の出征が決っていたので、六日の夜も燃えさかる広島を横目に洋上夜間演習に出ました。

だが、七日から私達にも、広島救援の命令が出、私は似島に行きました。この島には陸軍の検疫所があって、運ばれて来る負傷者を検疫所の講堂に収容する作業でした。

運ばれてくる負傷者は、皆血の海から匍匐上がって来た様な、血だらけの者や、半裸若しくは全裸に等しく、顔は茶褐色の黒みがかつた色でふくれ上り、目は見えるのか見えないのか、皮膚は焼けただれて、蛇の抜けがらを手先に垂れた様に垂れ下り、肉はむきだしで、正視に堪えない状況であった。

負傷者は次から次へと運ばれてくる。講堂はまたたく間に一杯になった。座っていられる者はなく、皆横たわって悶絶する声、うめく声、母を呼ぶ子供、子を呼ぶ母の声。

そして負傷者はとにかく水を欲しがった。『兵隊さん水を下さい。水を下さい』と、私達の足首にすがりつく。

火傷に水は禁物とされていたが、どうせ助らないのだから飲

裸、血だらけの衣類をわずかにまとっているだけ、顔は黒ずんで腫れ、殆ど目が開いていない者、すでに死んでる幼児を背負って夢遊病者のように、うつろな目をしてさまよっている若い母親、ボロボロの衣服の半狂乱の女が何か叫んでいる。余程熱かったのでしょう、防火用水や便壺にまで入って死んでる者もたくさんありました。

近くの川には一面に死体が浮いている。死体で川の水が見えない程死体が埋まっているのです。

死体を担架に乗せるため手をつかんで引上げようとすると、肉がむけて骨が見えるしまつ、猛暑の中で肉が腐っていく臭いのすさまじさは、五十年を過ぎた今でも忘れません。

育ち盛りの私達もご飯が喉を通らず、三日位で三キロ位やせました。倒壊飛散物や死体で足のふみ場もない道路を確保するための片付作業は、猛暑の中大変なものであった。何十人もの死体にふれたこの手を、今でもジッと見ることがある。

九日頃から多数の戦友に下痢が始った。人によって程度の差があるが、その後一ヶ月も続いた人や復員後も下痢に悩まされた人もあった様です。

広島之夜は、くすぶり続ける建物の残火と火葬（野焼き）の青白い光が、あちこちに見られ、正にこの世の様ではなかった。

十日から再び特攻訓練が始まった。原爆投下がなければ、七八日頃江田島をはなれる予定でした。

八月十五日午前の訓練が終り、重大発表があるからと、営庭に集合し、天皇陛下の声をラジオで聞いたが、内容はさっぱりわからず、上官からの説明もなかった。もう少しガンバレと云うことかと受けとりました。敗戦は翌日知りませんでした。

広島島の惨状を見た時、果して日本は勝てるかな？と疑問は感じていました。

その後訓練はなくなり、エンジンや兵器の返納も終り、九月十一日復員の途につき、金木へ向いました。

◇ 軍隊輸送の貨物列車に乗り、米原の駅で乗り換えましたが、その時、アメリカの専用列車が通過するとの放送があり、隊長以下ホームの下に隠れたこともあった。

◇ 十四日の夜大鰐に下車し、戦友と二人で久し振りに温泉に入るつもりでしたが、どこかの旅館にも外国人が居て恐しくて泊れず、結局大鰐の駅で一夜を明かしました。

◇ 九月十五日朝金木に着きました。原爆投下から音信不通になっていたので、家では大騒ぎになりました。江田島に居たことは特攻の秘密で、広島気付で手紙を出していたので、市内に居て全滅したと思っていたそうです。

◇ それまで身体の変調はなかったが、十月頃髪の毛が抜けはじ

め、禿げてしまいうので、とても心配しましたが、その後回復しました。大分後になってから原爆による初期の症状の脱毛であることがわかりました。

◇ 当時港では、原爆は伝染すると云われた。広島・長崎近辺の子供達は、被爆者の子と手をつないで遊ぶなと云われたそうです。又被爆者は、結婚や就職にも可成りの影響があったようです。私も結婚して子供が生まれる時は、本当に心配しました。

◇ 戦争は二度としてほしくない。

◇ 原爆に遭って亡くなった人達は殆ど身元不明で処置されませんでした。生き残った家族は、吾が子が、夫が、父が、何処で、どういう状態で、どの様にして死んだのか、その遺体はどうなったのか、一生気になることでしょう。

◇ 若しこの爆弾が金木町の役場の上空で爆発したら、東は昭和町から西は三軒町、南は栄町から北は若松町までのすべての木造家屋は、一瞬にして同時に倒壊し、しかも一斉に火を吹いたことでしょう。

◇ 広島島の爆心地に近い人達は、自分の子供が倒れた家の下敷きになり、その家に火がついている状況で、目の前で生きたままで焼け死ぬのを助けることも出来なかった人が沢山居ります。

◇ 私は声を大にして叫びます。ふたたび被爆者を作るな、核戦争起すな、二十一世紀に向けて核兵器のない、平和な世界を子供達へ!!

文芸

詩

現実の狭間で



会員
小山内 トモ子

もう一人の 私が居て
恋の唄だけが 聞こえた日々
流れるままに 流されて
罪深い日々と 自問答を
くり返しながら 生きて行く
楽しく さえずる 鳥の声も
頬を なでる そよ風さえ
恋の唄に聞こえる
恋の甘さと
現実の苦さの狭間で
いつしか あなたに
染まって 行く 私

